



オーラルヒストリーのキャリア研究における可能性

第6回希望学セミナー

梅崎 修

2006年1月26日

これは2006年1月26日のセミナーの口述記録を要約整理したものであり、

転載や法に反する引用は出来ません。

第6回希望学セミナー

2006年1月26日

テーマ「オーラルヒストリーのキャリア研究における可能性」

報告者 梅崎 修氏（法政大学キャリアデザイン学部）

発表の流れ

- ・自己紹介
- ・オーラルヒストリーのご紹介
- ・オーラルヒストリーをめぐる論点
- ・オーラルヒストリーの実践スキル
- ・キャリア調査への示唆

自己紹介（調査暦）

- ・専攻：労働経済学、人事労務管理論
- ・現状調査（聞き取り）
- ・アンケート・企業内人事データの統計分析
- ・オーラルヒストリー（歴史研究）
- ・方法論者ではなく、あくまでも調査屋（ユーザー）です。
- ・今回は、オーラルヒストリーの実践経験・スキルを中心にお話します。

オーラルヒストリーとは？

オーラルヒストリーとは、聴き手と語り手の共同作業によって、語り手が経験した過去の出来事を語りの形で記録に残すこと、又そうして保存された口述資料のこと。

(比較)：文書資料、数量データ

口述資料の利点も、文書資料の利点もある。

参考文献：Thompson,Paul(2000)、御厨貴(2000)、政策研究院・政策情報プロジェクト編(1998)等参照

オーラルヒストリーの歴史

簡単な紹介

明治20年、宮内省「史談会」：開国から維新までの事情を語る。『史談会速記録』は昭和13年まで続く 速記術の発展

同好史談会「明治初年」や篠田鈺造「明治百話」

勝海舟『氷川清話』や子母沢寛『新撰組遺聞』もオーラルヒストリー

落ち着いて、変化の時代を振り返る。なつかし系？

毎日新聞社『エコノミスト』の連載。「昭和経済史への証言」「高度成長への証言など証言研究会（日本労働研究機構）

テープレコーダーの発達、戦後高度成長期も、現状分析から歴史分析の対象となる。

研究系？

しかし、研究資料としての量、質に批判あり。

矢沢永吉著「成り上がり」は最も売れたオーラルヒストリー 生き様系？

オーラルヒストリーの学際性

様々な学問分野（文化人類学、民俗学、社会学、心理学、歴史学）で、ある程度共通する手法。インタビュー、ヒアリング調査、聞き書き、談話聴取、証言、ライフヒストリー、フィールドワーク、エスノメソドロジーなど、様々な言われ方をされるが...学際的研究は少ない。しかし...既存研究への反省から感心が集まる。

オーラルヒストリーのメリット

- (1) 新しい歴史事実の発見
- (2) 文書・データ資料のバイアスを埋める
- (3) 新研究分野の開拓
 - ・政策研究(意志決定プロセス分析)
例：キューバ危機「決定の本質」(グレアム・T・アリソン)
 - ・認識パターン、組織文化、階級文化の分析
文書・データ資料を組み合わせ、立体的分析

オーラルヒストリーのデメリット

- ・事例研究に止まる。実証的ではないという批判が多い。
- ・そもそも各分野によって調査目的が異なるので、同じに見えようとも求められる手法は異なる。実践経験しか話せない(?)
- ・インタビュースキルが技として伝わるので、研究手法の学習が難しい。人材育成に難。
- ・インタビューをしても公開してしまうので、努力が報われない。(調査者のインセンティブがない)

私が参加しているオーラルヒストリー

政策研究大学院大学COEオーラル政策研究プロジェクト

政策研究基礎資料を作成するため、公人の口述筆記を作成

政治学・行政学・経済学の研究者が参加。(戦後最大、1000回以上のインタビュー)

私がインタビュアーとして参加したオーラルヒストリー

労使関係のオーラルヒストリー 配布資料参照

技術者のオーラルヒストリー
経営者のオーラルヒストリー
日本の高度成長を支えた人々のオーラルヒストリー
政策研究大学院大学 アーカイブへ
継続オーラルヒストリープロジェクトへ

参加調査の特徴

- ・ 公人・オーラルヒストリーである。
- ・ 客観主義の立場：一人ひとりの証言は主観であるが、インタビュー数を増やし、複数の主観を重ね合わせれば、最終的に、真実の近くに到達 社会構築主義（対話の個別性に焦点を当てる）
- ・ 民俗学、ライフヒストリーの社会学、談話分析などの心理学とは調査目的が異なる。

対象別オーラルヒストリーの分類

- ・ ライフ・オーラルヒストリー：(生まれてから現在までインタビュー、つまり回顧録作成、平均全 10 回、最大 17 回も)
- ・ テーマ・オーラルヒストリー：(あるテーマの関係者に質問を絞ってインタビュー平均 1 ~ 2 回)
- ・ 組織オーラルヒストリー：(ある組織関係者に職歴に絞ってインタビュー平均 2 ~ 3 回)

事例紹介：生産性運動のオーラルヒストリー

生産性運動とは？ = 1948 年にマーシャル・プラン(欧州復興計画)の受入機関として設立された欧州経済協力機構(OEEC)がアメリカ政府の要請を受けてはじめた運動。日本では、経済同友会の主導で 1955 年に設立。

「日本生産性本部は、労使協調・技術進歩によって失業の防止し、経営者、労働者、消費者間の公正配分を生産性運動の原則とした。主な活動は、労使協議制の研究と普及、海外技術交流、経営者教育、中小企業育成、消費者教育等」

なぜ、生産性運動なのか？

生産性運動のひとつの目的 = 労働組合を生産性運動に取り込み、労使協調路線によって企業内合理化などを推進していくこと。

設立当初、総同盟は条件付参加、全労の海員組合やゼンセン同盟は遅れて参加。総評は反対。

複数のアクターが登場する。

戦後日本的経営の形成過程がわかる。

調査のテーマ

公式文書ではわからない、歴史的新事実の発見。

労使間の対立、労・労間の対立を、中立的、客観的立場からしつこく調査。対立する立場を前提に、対立するポイント、意見の調整過程を調査。

これまで分析対象から除外されてきた労働者文化、経営者文化、組織文化を証言として記録。

戦後労使関係史を生産性運動の視角から再構成、立体的分析 論文作成

生産性運動プロジェクトの概要

期間：2001年5月～現在まで

インタビュー回数

- ・元労働部職員 10名、関係者 4名(全 20回)
- ・元国際部職員 5名(全 14回)
- ・元経営開発部職員 5名(全 5回)
- ・海外視察団参加者(全 6回)...継続中
- ・その他、それぞれ意見の異なるユニオンリーダーや人事担当者のオーラルヒストリー(平均 10回×約 1数名)(付属資料参照)

もちろん、未公開文書資料の収集・整理、数量データベース作成も同時並行。

意外と少ない文書資料

公式文書のみで構成された資料(社史・団体史)

少ない、偏る、美化、組織内タブーなど。

例：「生産性運動 30年史」「事業報告書」「白書」など

また、そもそも先行研究が少ない。

社史の引用だけでは、研究として認められない。

元職員(著作を持たない、裏方)の証言を積極的に集める。

同じ派閥に偏らないように別ルートから紹介。

もちろん、文書資料とのクロスチェックやデータベースも作成。

私が発見したこと

細かい実証結果は省きます。

組織内における意思決定過程

収益事業や理念をめぐる部門間対立 部門間の食い違い証言に留意
部門レベルで捉えるのではなく、時々事業レベルで捉える必要あり。

組織内タブー(組織内資料には記されない)

国鉄マル生運動の失敗、その後の民営化

どのようなルートで話があり、結果的に誰の決定か？

1970年代、80年代の問題、『賃金白書』『労使関係白書』の賃金ベースアップ率の予測で日経連や労働組合が対立。

私が発見したこと

社会史・文化史の研究を構成する資料

企業文化の具体的事実

企業内研修の中身、青年運動の影響、社会心理学の影響、労働組合文化の実態

生産性教育の同窓会や個別企業の生産性運動の担い手から、生産性運動の影響を測る。

“使われる言葉”に注意する 強調的、協力的、相互信頼、近代的労使関係、科学的管理

敵対する団体との人的ネットワークもある。

オーラルヒストリーをめぐる論点

論点 聞いてわかるか？

採取情報を以下の二つにわけろ！

1. アンケート調査では聞けないが、インタビューならば具体的に聞けるし、聞きたいことも明確なケース(例：工場の配置、労働者の行動履歴など)小池和男著『聞き取りの作法』
2. コミュニケーションのやりとり自体、語り方そのもの。語り手の“意味の世界”を分析(内容分析) どう意味づけているかを分析
2のほうが希望学にとっては貴重な資料か？

論点 : 過去を聞く

- ・過去を聞く 現在を聞く、です。
- ・過去の具体的な事実、過去の行動の場合 記憶力の問題
- ・しかし...過去の経験(意味の世界)を聞くのは困難。
- ・過去の情報は、物語化され、個人のアイデンティティーとして蓄積されている。
自覚的なウソだけでなく無自覚なウソもある。

意味の世界

- ・過去の行動 意味づけ(経験)・物語化 アイデンティティー
- ・集合的な記憶 = 物語化...個人の意味づけは社会からも影響を受ける。
- ・例：ビートルズ問題(背中に電流が走った発言は個人の物語か？集団の物語か？)

記憶・物語化・アイデンティティー

- ・タイムマシン歴史学者たちの間違い。

- ・現状ヒアリング調査官 + 歴史学者 = タイムマシン歴史学者
- ・強引なインタビュー アイデンティティ崩壊 インタビュー中止
- ・では、話したいことを話してもらえばよいのか？

もっと高度なインタビュー

- ・物語を解体しつつ、インタビュー中に再構築する。(開いて結んで)
- ・ある技術者の自慢話...この製品は俺が開発した、俺がひらめいた。
 「でも、 さんも努力されていますね。たしか最初のアイデアは...」 解体
 「しかし...あなたのチームワークを活かすリーダーシップ！さすがです！」 再構築

論点 ：量か質か

会話分析	ライフストーリー 研究・民族誌	政策研究オーラル ヒストリー	ヒアリング調査	アンケート調査
自由面接法(対話や 語り方を採取)	自由面接法	半構造化アプロ ーチ + 自由面接法	半構造化アプロ ーチ	構造化アプロ ーチ

オーラルヒストリー実践スキル

オーラルヒストリーの進め方

ライフヒストリーのケース

- インタビューの申し込み
- 下調べ(地図、社史、団体史)、文書資料も確認
- 年表作成、(場合によっては質問表)
- 月1回のインタビュー(約10回)...1年経過
- 本人修正 直し
- インタビュー終了 公開の確認
- 第1回修正終了 再修正の確認(本人最終確認)
- 編集(小見出し付け、付属資料、整文、校正)
- 冊子印刷、公開...ほぼ1年半~2年経過
- 保存(時限付き公開・場合によっては文書の整理)...10年

インタビュー風景の観察

神楽坂オーラルヒストリー

研究のための調査ではありません。教育のための調査ですが、普段は映像化しませんので。百聞より一見。

インタビューの時間と空間

みる

- ・目を見る、見つめる。
 - ・おでこを見る。
 - ・肩の上の小人を見る。
- うなづく
- ・うん、うん、うん。
 - ・はい。へー。
 - ・ためて、ためて、・・・なる～ほど！

笑う

- ・相手との初めての共同作業。
- ・笑わせて、相手の緊張を和らげる。
- ・笑ってあげて、相手に話しやすくする。
- ・ニヤじゃなくて、あっはは。

インタビューの時間と空間

好きをアピール＝下調べをアピール

繰り返し、反応する

- ・相手のセリフを繰り返す。
 - ・時には、知っていることでも知らないふりを売ることもある。＝教える喜びを刺激する。
- 映像化する。
- ・手を使う。
 - ・質問を立体化する。
 - ・質問を映像化する。一緒に映画を見ましょう。

こっそり観察

- ・インタビュー終了直後のかき入れ時
- ・こっそりトイレ

私の失敗

- ・ある中小企業の元労働組合リーダーの話。

組合結成を計画

オヤジ(社長)は反対

組合結成の成功

社長も認めた。

……。 (泣く？笑う？)

笑う(決めつけ) 泣く(共感) 再質問

キャリア調査への示唆

キャリア研究への利用

キャリア研究における質的情報の重要性

転職成功者

定年後のキャリア

脱サラ

キャリアアドバイザー

起業経験など、証言の形で集める。

まずは量、それから量から質への転換

採取された情報

行動履歴そのもの

(意図) (行動) (意図)を類推

過去の経験 = 物語(意味づけされた過去)

(物語) 語りの意味世界

物語化の構造(推測)

なぜ、このように語るのか？

物語化への留意なし？

仮説と称する物語を語り手と共同制作しているのでは？

J.D.クランボルツ + A.S.レヴィン著

『その幸福は偶然ではないんです！』

金井壽宏著

『仕事「 - 皮むける」』

榊原清則

『キャリア転機の戦略論』

例外 加藤一郎「語りとしてのキャリア」は、語り方の変化を読み解く研究。

希望の採取

希望が生み出す行動(消費行動など) 希望を類推

過去の希望語り = 現在の物語(過去の経験を現在から意味づけたもの)

の類推 の語りを比較検討、矛盾を指摘しつつ、“希望の真実”を一瞬浮上させ、直ちに再物語化する。

...全てはインタビュー中の出来事である。大げさだが、一瞬の勝負である。